

こおりやまの野菜

直売野菜編

わさび菜
レタス
こまつな
ミニはくさい
ミニセルリー

Lettuce

Mini Celery

Komatsuna

Mini Hakusai

Wasabina



目次

CONTENTS

直売野菜編

わさび菜

栽培の概要……1
栽培技術編……2～3



レタス

栽培の概要……4～5
栽培技術編……5～7

こまつな

栽培の概要……8
栽培技術編……9～11



ミニはくさい

栽培の概要……12
栽培技術編……13～15

ミニセルリー

(ホワイトセルリー)

栽培の概要……16
栽培技術編……17



わさび菜

分類

アブラナ科

わさびの種類ではなく、カラシ菜の仲間です。わさびに似たピリリとした辛みがあり、わさび菜という名前がついている。加熱すると、その独特の風味が弱くなるので、生のまま、サラダ、漬け物等に利用する。

特徴

- ダイコン葉に似た大きなきざみがある葉形で、葉面がちりめん状に縮む。
- わさびに似た独特の辛みがあり、サラダ、漬け物等での利用に適する。
- 寒さに強く、秋冬期に無加温でハウス栽培が可能。
(基本的に一重被覆で栽培できるが、最低気温が -5°C を下回る場合は小トンネル等で二重被覆とする。)
- 葉を順次摘み取りながら収穫する。
春になって抽台するまで長期間に渡って収穫することが出来る。

品種

- わさび菜(固定種 中原採種場)

栽培の概要 (ハウス栽培)

作型	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
	上中下	上中下	上中下	上中下	上中下	上中下	上中下	上中下	上中下	上中下	上中下	上中下
かき葉栽培								●	●			
抜き葉栽培			●						●			

● 播種 ● 定植 ■ 収穫

※日長が長いと「抽台」するので、秋～冬と春～夏で栽培方法を変える。

秋～冬：株を大きくし、葉を随時摘み取りながら収穫する「かき葉栽培」とする。

春～夏：抽台が早く、固くなりやすいので、若く軟らかいうちに株ごと収穫する「抜き葉栽培」とする。

栽培技術編 (かき葉栽培)

1 播種・育苗

セルを利用する場合

①必要資材(1a当たり・定植本数2000本)

- 種子……20ml
- 128穴セルトレイ……20枚
- 播種用培土……70ℓ
(pH6.0~6.5 EC0.3~0.5)



②方法

- 1穴に1粒は種とする。
- 播種後軽く覆土し、上面から十分灌水したのち、新聞紙をかけておく。3割程度発芽が揃ったら、朝か夕方の光線が弱い時間帯に新聞紙を除去する。
- 乾燥させないように、こまめに灌水する。

直播の場合

- 条間20cm程度で条播きする。
- 本葉2枚頃までに、大きな株を残して随時間引きし、株間10cm程度とする。
- 種子は1a当たり50ml程度必要。

2 ほ場準備

- 土壌改良資材は定植2週間前までに施用する。基肥は1週間前までに施用し、マルチを張る。
- 定植の2日程度前に十分灌水し、マルチ内の水分を調整しておく。
- ホウ素欠乏を防ぐため微量元素肥料(FTE)を施用する。
- 土壌病害防止のため、キャベツ、ダイコン等のアブラナ科作物との連作を避ける。

●施肥(例)

(kg/10a)

肥料名	施用量	成分量			
		N	P	K	
土壌改良資材	完熟堆肥	2,000			
	苦土石灰	60			
	苦土重焼燐	40		14.0	
	FTE	2			
基肥	CDU S555	60	9.0	9.0	9.0
	硝燐安加里 S604	40	6.4	4.0	5.6
追肥	トミー液肥ブラック	40	4.0	1.6	2.4
施肥成分量			19.4	28.6	17.0

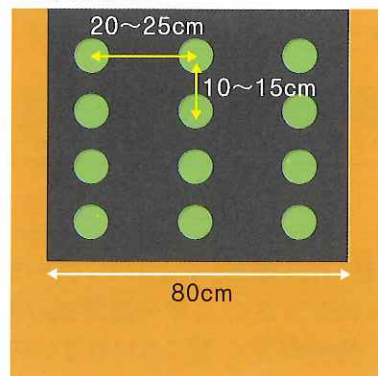
※土壌分析をして施肥量を加減する。 ※夏秋野菜の後作の場合、基肥は不要。

3 定植

- 本葉3~4枚(播種後25日程度)で定植適期となるので、節間のつまった無病苗を定植する。
- 定植が遅れて苗が老化すると活着が悪く収量が上がらないので、適期定植を心がける。
- 条間は20~25cm、株間は10~15cm程度とする。



●畝の模式図



4 栽培管理

① 温度管理

- ◎生育適温は5℃～20℃程度。
- ◎低温に強く、冬場でも無加温ハウスで栽培可能であるが、最低気温を5℃以上確保した方が順調に生育する。

② 灌水・追肥

- ◎土壌表面が乾燥したら適宜灌水を行う。
- ◎収穫開始後、月1～2回程度追肥を行う。
(1回当たりの追肥量は窒素成分で1kg/10a程度)
※ただし、厳寒期の追肥は不要。



5 収穫

- ◎1回の収穫に付き、長さが20cm程度になった葉を、1株から1～2枚収穫する。
- ◎収穫後、1株に3～4枚の葉が残るようにして収穫を繰り返す。



収穫前



収穫後

- ◎縮れが少ない「初期の本葉5～6枚」は、辛みが薄いので除去する。
- ◎春から夏にかけては、軟らかいうちに株ごと収穫する「抜き菜栽培」とするが、この場合も初期の本葉2～3枚は辛みが薄いので除去する。
- ◎灌水量が多いと辛みが少なくなるので、過剰な灌水はしないように注意する。



収穫した葉

6 出荷調整

- ◎葉の長さが20cm程度で収穫し、茎の太さを揃えて、袋詰めをする。この時、切れ葉や枯葉、病虫害の被害葉、変色葉を入れないように注意する。



7 主な病害虫

- ◎病害虫の発生は少ないが、「アブラムシ」等が発生する場合がある。その場合、「野菜類」、「あぶらな科野菜」、「非結球あぶらな科葉菜類」に登録のある農薬で防除を行う。収穫期は、使用できる薬剤が限られるので、発生初期の防除を徹底する。



レタス

分類

キク科

ビタミンやミネラル分をバランスよく含むサラダの定番野菜。

特徴

● 生育適温

最適温度は15～20℃。冷涼な気候を好む。暑さには弱く、25℃を超えると生育不良になり、高温下では結球異常や腐敗が生じやすい。

● 抽台（花茎の伸長）

高温、長日条件下によって抽台する。生育期間に25℃以上が継続するような場合には注意が必要。

● 土壌

生育に最適なpHは6.0～6.5。土壌適応性は広いが、粘土質よりも砂質土、火山灰土のような水はけの良い土質が作りやすい。窒素成分が多すぎると病害の発生が極端に多くなる。

品種群と特性

品種群	熟期	結球型	抽台	耐暑	低温肥大	春どり	夏どり	秋どり	冬どり	特徴
マックソイル	極早生	葉数	晩	◎	×	△	○	△		高温期向き。乾燥土や低温期では小玉傾向。
エンパイヤー	早生	中間	極晩	◎	×	×	◎			葉色淡く、結球性がややあまい。収穫適期の幅が広い。気温上昇期は×
カルマー	早生	中間	中早	△	○	○		○	△	葉色濃く、収穫期の揃い、球の形状が優れる。夏期に過剰生育しやすい。
サリナス	中晩生	葉重	早	×	○	○			○	チップバーンに強いが、ウイルス病に弱い。低温栽培にも適応。
グレートレークス	中生	中間	中	○	○	○	○	○	○	葉色が濃く、大玉傾向。低温肥大性に優れる。

● 品種の選定

晩抽性、耐暑性、低温結球性を考慮し、選定する。

春どりに向く品種：ファルコン（サカタのタネ）、インカム（みかど協和）、ステディ（ツルタのタネ）など

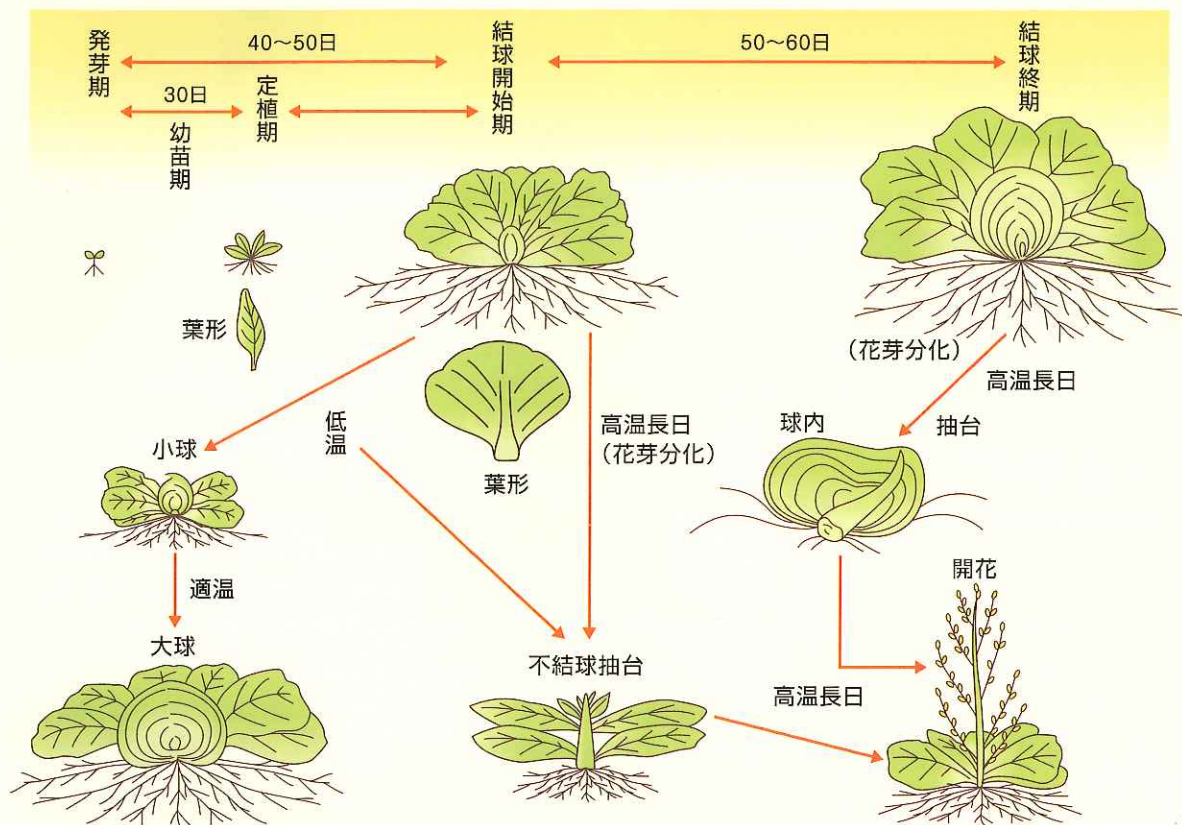
秋どりに向く品種：シリウス（サカタのタネ）、シスコ（タキイ種苗）、レガシー（タキイ種苗）など

栽培の概要 (ハウス栽培)

作型	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
	上中下	上中下	上中下	上中下	上中下	上中下	上中下	上中下	上中下	上中下	上中下	上中下
春どり		●	●	●	●	■						
秋どり				■	■	■		●	●	●	■	■

● 播種 ● 定植 ■ 収穫 ◀▶ 抽台しやすいため播種を避ける期間(4月下旬~6月中旬)

● レタスの一生の形態的变化



レタス

栽培技術編

1 播種・育苗

① 必要資材 (1aあたり・定植株数600株)

- ◎ 種子……裸種子3ml又はコート種子1000粒
- ◎ 200穴セルトレイ……5枚
- ◎ 播種用培土……18ℓ

② 方法

- ◎ 1穴に1粒は種とする。
- ◎ 好光性種子なので、覆土は薄くする。(2mm程度)
- ◎ 播種後、上面から十分灌水したのち、新聞紙をかけておく。3割程度発芽が揃ったら、朝か夕方方の光線が弱い時間帯に新聞紙を除去する。
- ◎ 乾燥させないように、こまめに灌水する。



播種後7日目の苗の様子(徒長気味)

◎気温の高い時期にハウス内で育苗すると軟弱な苗になってしまうので、できるだけ温度を抑制する(遮光ネットを利用したり、循環扇、送風機、扇風機を利用して強制通風するなど)。



2 ほ場準備

- ◎堆肥や石灰などの土壌改良資材は播種2週間前までに施用し、深耕しておく(pH6.0~6.5になるように矯正する)。
- ◎基肥は1週間前までに施用する。
- ◎条間に灌水チューブを設置し、マルチを張る(夏期は白色を使うと温度上昇を抑制できる)。
- ◎定植の2日程度前に十分に灌水し、マルチ内の水分を調整しておく。

●施肥(例:ハウス栽培)

(kg/10a)

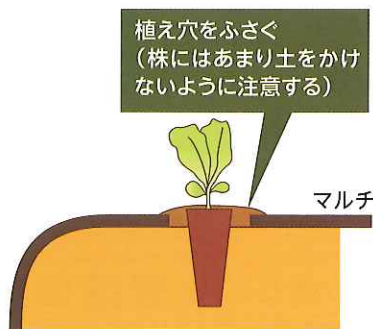
肥料名	施用量	成分量			
		元肥	N	P	K
土壌改良資材	堆肥	4,000			
	苦土石灰	100			
	BMようりん	40		4.0	
基肥	CDU S555	60	9.0	9.0	9.0
	発酵けいふん	200	3.0	4.6	2.1
追肥	硝燐安加里 S604	40	6.4	4.0	5.6
施肥成分量			18.4	21.6	16.7

※連作となってしまう場合は、塩類濃度障害を防ぐため、1~2割程度減肥。

3 定植

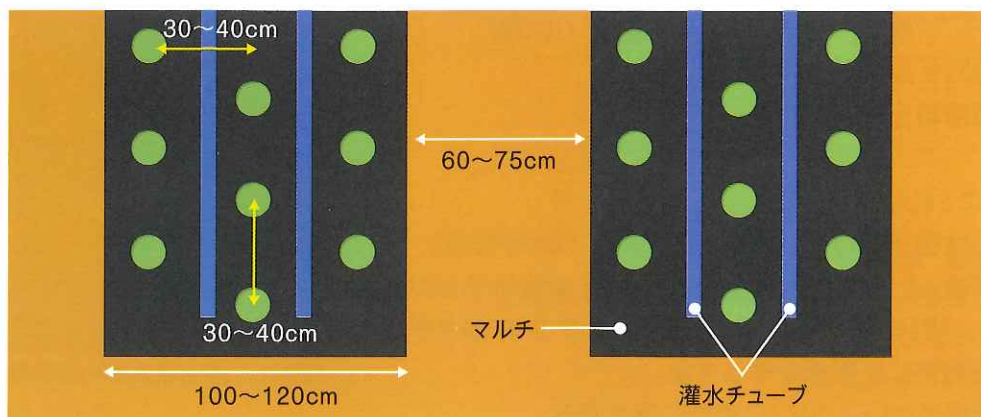
本葉4~5枚(播種後3週間程度)を目安に定植する。植栽密度は条間30~40cm、株間30~40cmで浅植えとする。マルチの上にも土を乗せ、株とマルチの間に隙間を作らないようにする(マルチの中を風が通ると熱風で株が痛む)。定植後は、株元の土が湿るまで灌水し、根の活着に十分な水分を与える。

●定植の仕方



定植後7日目の様子

●畝の模式図



4 栽培管理

① 温度管理

◎ハウス内の温度は日中20℃前後を目安に換気する。

5℃以下になると生育が停止する。

25℃を超える高温と長日条件が重なると、抽台の危険性が高くなる。

※抽台しやすい時期はハウスの屋根に遮光ネットをかけて温度上昇を抑える管理を行うが、朝夕の温度の低い時間帯にはネットを外し、直射日光を入れる。

※生育期間の平均気温が10℃を下回る時期には、トンネル被覆とする。この場合トンネル内の高温、蒸れは変形球や病害発生の原因になるので換気をする。

② 灌水・追肥

◎灌水量はマルチを使用している場合、しおれない程度とする。

◎追肥は定植後2週間程度の時期に1回、結球開始時期に1回実施する。

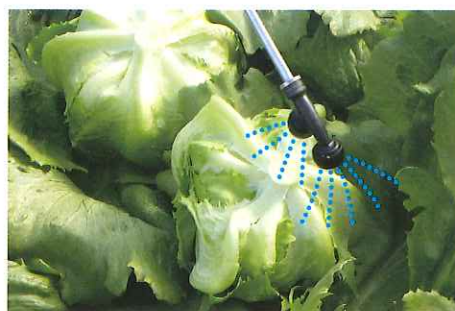
結球の大きさを左右する外葉を大きくするためには水、肥料とも必要であるが、過湿や窒素過剰は変形球や腐敗の原因になるので、特に生育後期に水、肥料は控え目になるよう注意する。

5 収穫・出荷調整

◎収穫時期は播種日から数えて春どりで60日程度、秋どりで85日程度、冬どりで120日程度が目安。玉を触って、しっかりと締まっていたら収穫時期。外葉を3枚程度付けて収穫する。

◎切り口から出る乳白色の汁をそのままにしておくと、切り口が赤く変色してしまうので濡れた布で拭く(噴霧機で洗い流す方法もある)。

◎外葉を2～3枚付けて出荷する。1玉400～500gが目安。



噴霧機で洗い流している例

6 主な病害虫

● すそ枯れ病

地際の基部などに褐色の斑点が現れ下葉が枯れる。激発すると結球全体が萎れ、腐ることもある。



低温多湿条件で多発、また、株元に土がかかりすぎると発病が増加するので、マルチなどで土のはね上がりを防いだり、結球期に薬剤散布をして被害を抑える。

● 菌核病

外葉の基部から発病、褐色の水浸状の病斑ができ株元から腐敗する。白色のカビが形成され、後に黒色の菌核になる。



気温20℃前後、多湿条件で多発する。発生すると防除が難しいので、予防の薬剤散布が重要である。

● ヨトウガ

結球内や地際の外葉を食害するため、病害の原因になる。結球内部に侵入している場合、外葉などに食害痕や褐変が見られる。内部に侵入してしまうと防除が難しくなるので初期防除に努める。



● アブラムシ類

ウイルス病を媒介するので、定植時に粒剤を施用するなど予防に努める。



こまつな

分類
アブラナ科

全国で栽培され、周年出荷が可能な野菜の定番。栄養面では、カルシウム、鉄分、ビタミン類が、他の葉菜類よりも豊富に含まれ、健康野菜として高く評価されている。

特徴

- 他の軟弱野菜と比べ栽培が容易であり、暑さ、寒さに強く、周年栽培が可能である。
- 土壌適応性が広く、連作にも強い。

品種

周年栽培できる品種が主流だが、栽培に適する季節が決まっている品種もある。

- 菜々子、菜々美(タキイ種苗)、よかつた菜(カネコ種苗)、みなみ(トーホク)等

※夏場の栽培には、萎黄病の抵抗性品種を利用する。

※根こぶ病が発生する場合は、根こぶ病用の薬剤を土壌に施用して栽培するか、アブラナ科作物を連作しないようにする。

栽培の概要

作型	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12							
	上中下	上中下	上中下	上中下	上中下	上中下	上中下	上中下	上中下	上中下	上中下	上中下							
施設	周年栽培が可能 <table border="1" style="margin-left: auto; margin-right: auto;"> <thead> <tr> <th colspan="2">主な播種期の収穫までの生育日数</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>春・秋</td> <td>40～50日</td> </tr> <tr> <td>夏</td> <td>20～30日</td> </tr> <tr> <td>冬</td> <td>70日～</td> </tr> </tbody> </table>											主な播種期の収穫までの生育日数		春・秋	40～50日	夏	20～30日	冬	70日～
主な播種期の収穫までの生育日数																			
春・秋	40～50日																		
夏	20～30日																		
冬	70日～																		
露地	盛夏を除いて栽培可能。低温期はトンネル被覆を実施する。																		

●播種 ◡トンネル ■収穫

栽培技術編

1 ほ場準備

- ◎ 土壤改良資材は定植2週間前までに施用し、基肥は1週間前までに施用する。
収穫までの日数が短いので全量基肥とする。
- ◎ 畝幅100～120cm、高さ5cm程度の畝を作る。
- ◎ 播種の2日程度前に十分灌水し、土壌の水分を調整しておく。

● 施肥(例)

(kg/10a)

肥料名	1作目				2作目				3作目				4作目	
	施用量	成分量			施用量	成分量			施用量	成分量				
		N	P	K		N	P	K		N	P	K		
土壤改良資材	完熟堆肥	2,000											無肥料	
	苦土石灰	100												
基肥	硝磷安加里 S604	60	9.6	6.0	8.4	40	6.4	4.0	5.6	20	3.2	2.0		2.8
施肥成分量			9.6	6.0	8.4		6.4	4.0	5.6		3.2	2.0		2.8

※ハウス内で連作すると、前作の肥料が残り塩類濃度障害を起こしやすいので注意する。ECを測定して、施肥量を調整するのが望ましい。

EC値(mS/cm)	施肥量
～0.4	基準量
0.4～0.8	基肥1/2
0.8～	無肥料

2 播種

- ◎ 1a当たり播種量……100ml(すじ蒔き、点播の場合)
省力化のためシーダテープ、播種機等を利用する。
- ◎ 栽植密度(130株/m²～220株/m²)
すじ蒔き: 条間12～15cm、株間3～5cm。
点 播: 条間12～15cm、点播間隔10～12cm、
1穴3～4粒播種。

※夏場は株間を広くとり、軟弱に育たないようにする。
※厚まきになった場合、本葉2～3枚までに、随時間引きを実施する。



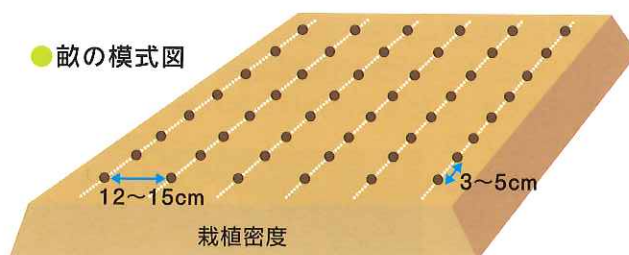
シーダテープ



播種機



間引き後の状況



◎ 播種後は、散水式の灌水チューブ等を用いて、「均一」に十分灌水する。

※ 作業時間の約8割は収穫と調整に占められる。1日当たりの収穫可能面積は、1人当たり0.5a程度なので、播種は、収穫できる量を考慮して、7～10日間隔で実施する必要がある。

3 栽培管理

① 温度管理

暑さにも寒さにも強い野菜であるが、夏は涼しく、冬は温かくすると、生育が良く品質の良いものができる。

1年を通じ、20℃程度で換気を実施する。

◎冬期は、-10℃程度まで耐えるので、無加温で栽培できるが、下記のように、不織布等を利用すると生育が早くなる。

◎夏期は、十分換気を行うとともに、20～40%の遮光を実施することが望ましい。特に、播種から発芽が揃うまでは、強めの遮光を実施すると発芽揃いが良くなる。



不織布等のべたがけ利用について

冬

12月上旬から保温のため利用する。「播種後の発芽を揃える」、「生育を促進する」等の効果が期待できるが、「日射量が少なくなる」、「湿度が高くなる」等の欠点もあり、生育が軟弱徒長になりやすいので、生育初期か中期に、天候と生育を見て除去する。

春、夏、秋

主に「播種後に土壌の乾燥を防止して発芽を良好にする」ために利用する。しかし、「高温障害の発生」、「湿度が高くなる」等の欠点があるので、発芽後、早々に除去する。



② 灌水

◎土壌表面が乾燥したら適宜灌水を行うが、最終灌水は、草丈10cm程度、収穫10日前までとし、収穫物を堅く仕上げる。一度に多量の灌水をすると軟弱になりやすいので、少量ずつ灌水する。



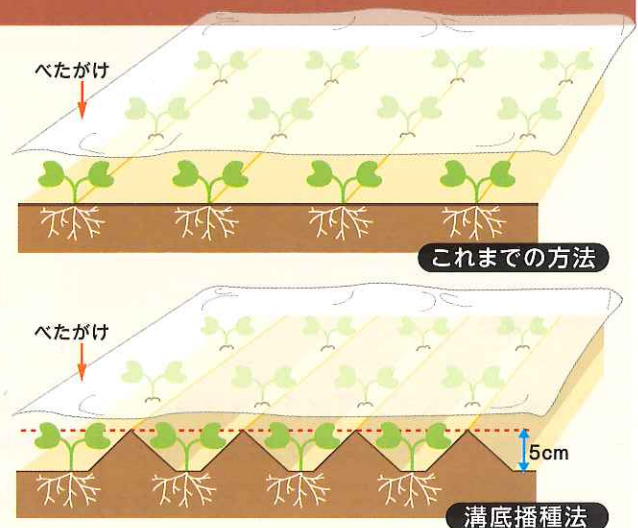
③ その他

◎ハウス栽培では、コナガ等の防除のため、防虫ネットを被覆する(目の細かいネットは、夏場の栽培では、通気が悪く温度が上昇しやすいので、2mm×4mm程度のネットを使用)。また、被覆材をUVカットフィルムにすれば、アブラムシ、アザミウマ等の被害を軽減することができる。

べたがけ・溝底播種について

冬期間の栽培において、「5cm程度の深さの溝の下に播種」し、不織布を被覆すると、通常の平床栽培に比較し、地温が上がり生育が良くなる。

なお、この方法は、過湿により軟弱徒長になりやすいので冬場のみ利用する。



4 収穫・出荷調整

- ◎本葉4～5枚、草丈20～25cmで収穫する。
- ◎切れ葉や枯葉、病害虫の被害葉、変色葉を除去し、200g程度に調整し出荷する。



5 主な病害虫

● 萎黄病

高温期に発生する土壌病害で、葉全体が黄化し枯死する。生育初期に発病すると、立枯れ状の症状となる。発生があった場合、土壌消毒や抵抗性品種を導入する。



● 白さび病

糸状菌の一種で葉に盛り上がった白色の菌体を生じ、商品価値がなくなる。露地栽培で4～6月、10～11月に発生が多く、一度発生すると、毎年発生が続く。
白さび病に抵抗性をもった品種もある。



Memo

ミニはくさい

分類

アブラナ科

重さ500g～1kg程度、通常の白菜の1/4位の大きさの、小さくてもしっかり結球するミニはくさい。通常の白菜は、半分や1/4にカットされての販売が主流だが、「ミニはくさい」は、1玉で購入して使い切れる量で、草丈も短かく冷蔵庫に収納しやすい等、使い勝手が良く、今後の需要の伸びが見込まれる。

特徴

- 通常の白菜に比べ、高温、病害に強い品種が多い。また、栽培期間も短いので、栽培しやすく、通常の白菜の端境期である初夏や初秋に収穫することが出来る（周年で栽培できるとしている品種もある）。
- 播種後50～60日程度で、高さ20cm位、重さ500～1,000g程度でしっかり結球し収穫可能となる。（通常の白菜の1/4位の重さ）



ミニ白菜と通常の白菜

品種

- お黄にいり、サラダ(タキイ種苗)、黄味小町、ゆめいろはくさいタイニーシュシュ(サカタのタネ)、娃娃菜(わわさい、トキタ種苗)等

栽培の概要 (ハウス栽培)

作型	4	5	6	7	8	9	10	11	12
	上 中 下	上 中 下	上 中 下	上 中 下	上 中 下	上 中 下	上 中 下	上 中 下	上 中 下
春期栽培	●	●	●	●					
秋期栽培					●	●	●	●	●

● 播種 ● 定植 ■ 収穫

※ 春期栽培：寒い時期から高温に向かうので、品種により異なるが抽台の危険性がある。無理な早蒔きはさける。

※ 秋期栽培：しっかり結球するには、葉枚数を十分確保することが必要。播種が遅すぎると、寒さで外葉の枚数が足りず十分に結球しなくなる。

栽培技術編

1 播種・育苗

セルを利用する場合

① 必要資材 (1a当たり・800株定植)

- ◎ 種子……10mℓ
- ◎ 128穴セルトレイ……10枚
- ◎ 播種用培土……35ℓ
(pH6.0~6.5 EC0.3~0.5)

② 方法

- ◎ 発芽率が高いので、1穴に1粒播種を基本にする。
- ◎ 播種後軽く覆土をし、上面から十分かん水したのち、新聞紙をかけておく。3割程度発芽が揃ったら、朝か夕方方の光線が弱い時間帯に新聞紙を除去する。
- ◎ 乾燥させないようにこまめに灌水する。



セルトレイでの生育状況

直播の場合

- ◎ 条間30cm、株間25cm程度とし、1カ所に3~4粒播種後、軽く覆土し、発芽まで、乾燥させないように管理する。
- ◎ 発芽後は随時間引きを実施し、本葉6~7枚になる頃までに1本立てとする。
- ◎ 種子は1a当たり20mℓ程度必要。

2 ほ場準備

- ◎ 土壌改良資材は定植2週間前までに施用し、基肥は1週間前までに施用する。
- ◎ 定植の2日程度前に十分灌水し、土壌の水分を調整しておく。
- ◎ ホウ素欠乏を防ぐため微量元素肥料(FTE)を施用する(特に白菜には、ホウ素欠乏によるゴマ症が発生しやすい)。
- ◎ 土壌病害防止のため、キャベツ、ダイコン等のアブラナ科作物との連作を避ける。特に根こぶ病の発生している圃場は避ける。

● 施肥(例)

(kg/10a)

肥料名		施用量	成分量		
			N	P	K
土壌改良資材	完熟堆肥	2,000			
	苦土石灰	150			
基肥	CDU S555	130	19.5	19.5	19.5
	FTE	2			
施肥成分量			19.5	19.5	19.5

※ 土壌分析をして施肥量を加減する。

※ 施肥が多いと、病害虫の発生やゴマ症発生の要因となる。施肥量は、通常栽培の白菜の8割程度。

3 定植

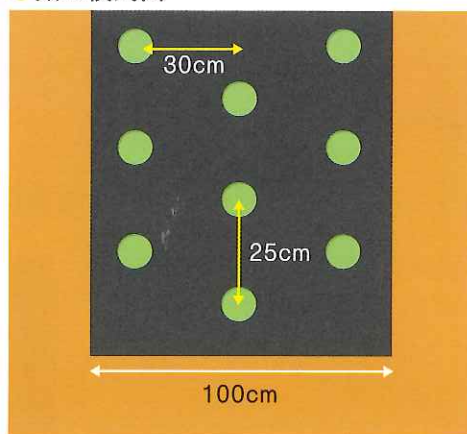
- ◎ 本葉4枚位(播種後20日程度)の、根鉢が出来た無病苗を定植する。
- ◎ 定植が遅れて苗が老化すると、その後の生育が悪く収量が上がらないので、適期定植を心がける。



定植作業状況

◎600～800gのミニはくさいで収穫するには、栽植密度が大切。100cm幅の畝の場合、3条千鳥植え、条間30cm、株間25cmを目安にする。(10a当たりの栽培株数は、6,000～8,000本で、通常の白菜の2～3倍程度となる。株間を広げると、2kg程度のやや大きめの白菜となる。)

●畝の模式図



4 栽培管理

①水管理

◎生育に水分は必要だが、過湿には弱いので、高畝にして水はけを良くする。生育後半は、病気を予防し、しっかりした白菜にするため、水分は控えめにする。

②追肥

◎発芽後25日頃から急激に伸長するので、この頃を目安に追肥する。なお、基肥が緩効性であれば、栽培期間が短いので追肥は不要。



作期の拡大

黒マルチの利用

「秋播種」では、黒マルチを利用すると、最大で15日程度までマルチより遅く蒔くことが可能となる。ただし、マルチを利用する場合、畝を高くし、過湿にならないよう注意する。

保温育苗

「春播種」では、ビニールハウス等で「最低気温を10℃以上で育苗」した苗を、4月中旬にマルチを利用して定植することにより、5月下旬からの収穫が可能となる。ただし、最低気温が10℃を下回る時が続くと、花芽分化が起こり早期抽台する危険性がある。



5 収穫・出荷調整

◎ハクサイの頭を手で押して、固くしまっていれば収穫適期。連作障害回避のため、収穫後は株を抜き取る等、できるだけ根を圃場内に残さないようにする。

◎500g～1kgが入る大きさの出荷用袋などに1株ごとに入れて出荷する。

※「小型のハクサイ」であることを強調するシールを貼ったり、ポップを掲示することも販売を促進する方法。



6 主な病害虫

● ナンブ病

高温期に発生しやすい土壌病害であり、降雨や灌水により葉柄部の傷口や害虫の食害孔などから侵入する。罹病すると株全体が腐敗軟化し、悪臭を発する。対策としては、適期播種、抵抗性品種の利用等がある。



● コクハン病

秋冬作での早蒔き、窒素不足等で発生が多く、葉に1cm程度の淡褐色の同心円状の病斑ができる。



● ハクハン病

11月～12月に発生が多く、老葉から発生し、1cm程度の灰白色の病斑ができる。



● ベト病

晩秋、多湿条件で発生が多く、下葉に淡黄色の不規則な病斑ができ、次第に拡大し葉脈に限られた角斑となり、葉の裏に汚白色のカビが生えてくる。



● 害虫

アオムシ、コナガ、ヨトウムシ類、アブラムシ類等、アブラナ科に付く害虫は、ほぼハクサイにも付く。



コナガ



ヨトウムシ



アブラムシ



カブラハバチ

ミニセルリー

(ホワイトセルリー)

分類

セリ科



ミニセルリーは、通常の大株セルリーとは種類が異なり、密植して栽培し、ミツバのような草姿で収穫する。通常のセルリーと比較して、繊維が軟らかく、香り、味がマイルドなので、サラダやスープに入れて味へアクセントをつけるなどの利用ができる。

特徴

- 播種後、75～80日、草丈が20～25cmで収穫する(通常のセルリーは播種から収穫までの日数は150～180日程度)。
- 病害虫の発生が少なく栽培が容易(通常のセルリーは、夏場の高温により軟腐病が発生しやすく栽培が難しい)。

品種

- ミニホワイト(タキイ種苗)

栽培の概要 (ハウス栽培)

作型	4			5			6			7			8			9			10			11			12		
	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下			
	●																										

● 播種 ■ 収穫

栽培技術編

1 ほ場準備

- ◎ 土壌改良資材は定植2週間前までに施用する。基肥は1週間前までに施用しマルチを張る。
- ◎ 定植の2日程度前に十分灌水し、マルチ内の水分を調整しておく。

● 施肥(例)

(kg/10a)

肥料名	施用量	成分量		
		N	P	K
土壌改良資材	完熟堆肥	4,000		
	苦土石灰	100		
基肥	CDU S555	100	15.0	15.0
追肥	トミー液肥ブラック	40	4.0	1.6
施肥成分量			19.0	16.6

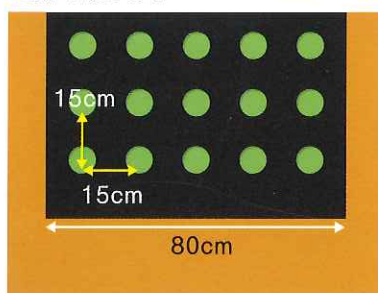
2 播種

- ◎ 1a当たり播種量……100ml
- ◎ 株間が15cm×15cm程度の穴あきマルチを利用して、1穴に5～6粒点播する。
(4、5月播種では雑草防止と地温上昇抑制のために白色か銀色マルチを、8、9月播種では雑草防止と生育促進のために黒色マルチを使用する。)



- ◎ 発芽に光が必要な光好性種子なので、種子が隠れる程度の薄い覆土とする。
- ◎ 発芽までは好適な条件で10～14日程度かかる。
- ◎ 発芽揃いを良くするために、不織布をかけて湿度を保つ。

● 畝の模式図



発芽の状況

3 栽培管理

- ◎ 土が湿っている状態で生育が良いので、土壌表面が乾燥したら適宜灌水を行う。
- ◎ 播種後30日頃から、2週間に1回程度、追肥として液肥を施用する。1回当たりの追肥量は窒素成分で1kg/10a程度。
- ◎ 栽培適温は日中20～25℃、夜温15～20℃程度。25℃を目安に換気する。

4 収穫・出荷調整

- ◎ 草丈が25cm前後になれば、株元から刃物で切り取り収穫する(根を少し残す程度の深さで収穫すると、株のばらけが少なく出荷調整しやすい)。
- ◎ 切れ葉や枯葉、病害虫の被害葉、変色葉を除去し、50g程度に包装し出荷する。

5 主な病害虫

- ◎ 「野菜類」「セリ科葉菜類」「セルリー」に登録のある農薬で防除を実施する。

病気: 軟腐病、葉枯病、斑点病

害虫: アブラムシ類、ヨトウムシ類、ハダニ類等



出荷調整後のミニセルリー

こおりやまの野菜

直売野菜編

参考文献

- ・福島県野菜指導指針(平成20年4月、福島県農業総合センター)
- ・農業技術大系野菜編6、7(農山漁村文化協会)
- ・原色 病害虫診断防除編 3-①、3-②(農山漁村文化協会)
- ・タキイ種苗株式会社 野菜前線

- 「こまつな」、「ミニはくさい」の病害虫写真
・タキイ種苗株式会社

発行

郡山市

(農林部営農推進課 農業センター)

〒963-0213 郡山市逢瀬町多田野字寒風坦161

TEL.024-957-2880

FAX.024-967-0019

制作 ●平成24年3月

